校長室だより～燦燦～ №６３６

令和の日本型学校教育

2022.10.12

「令和の日本型学校教育」というタイトルが世に出ている。「令和の」がついているということは、すでに「日本型学校教育」が存在しているということである。「日本型」ということは、諸外国と比べて違うということであろう。

では、それは、いったいどのような教育なのか。明快に答えられる学校の先生は、それほど多くはないだろう。「学校が学習指導のみならず、生徒指導等の面でも主要な役割を担い、様々な場面を通じて、子供たちの状況を総合的に把握して教師が指導を行うことで、子供たちの知・徳・体を一体で育む」とある。なるほど。当たっているというか、実際にそうなっている。

そのため、日本の中学校の先生は、世界で一番忙しいとなる。あらゆることをすべてやっているのである。「日本型」の特徴は、すべての子どもたちに一定水準の教育を保障する平等性や全人教育であろう。他国の教育システムや学校と比較すると、そのことがよくわかる。

今までの日本の教育はどうだったのか。経済発展を支えるために、みんなと同じことができる、言われたことを言われたとおりにできる、上質で均質な労働者の育成が高度経済成長期までの社会の要請として学校教育に求められてきたことは否めない。

正解（知識）の暗記の比重が大きくなり、自ら課題を見つけ、それを解決する力を育成するため、他者と協働し、自ら考え抜く学びが十分になされてきたかというとどうであろう。結局、いまだに今までの日本の教育から抜け出せてはいない。

そこで、「令和の」となる。「個別最適な学びと協働的な学びの一体的な充実」により、日本型学校教育のブラッシュアップをしようというのである。個別最適な学びに関しては、指導の個別化と学習の個性化を教師の視点から整理した概念が「個に応じた指導」となる。この個に応じた指導を学習者の視点から整理した概念が「個別最適な学び」となる。

では、目指すべき「令和の」日本型学校教育の姿はどのようなものなのか。それは、すべての子どもたちの可能性を引き出す個別最適な学びと協働的な学びの実現となる。すでに経済社会は、みんなと同じことができる、言われたことを言われたとおりにできる人材など求めてはいない。

にもかかわらず、正解主義や同調圧力のようなものが学校には残っている。もしかしたら、惰性とは言わないが慣性によって、今もなお変わらずに忙しい忙しいと言いながら走り続けているのではないか。

昔と比べれば、枝葉の部分は変わってきている。だが、幹の部分は変わってはいない。かつての成功体験にすがっているのかもしれない。あるいは、かつての生徒指導上の問題が多発した経験から、変えることが、変わることが、こわいのかもしれない。学校には、そういった体質がある。

学校とは、社会の変化から遅れて、社会を担う人材を育成するところではないだろう。本来は、社会の変化を先導して生み出すという役割と責任を併せもつのではないか。次世代の社会を担う人材の育成が学校に課せられた責務である。そうであるならば、もう少し子どもたちを自立した学習者として育てていかなければならない。

令和の野田中型教育とでもいうべきものを、次年度以降に向けて考えていきたい。野田中の生徒が社会で活躍する姿をイメージしながら。そうすれば、もう少し子どもの可能性や個性などに目がいくように思う。